閑人閑語

伝統からの新生

● 猪飼 國夫 ●

● 裏千家の挑戦

オリンピックの開催を1年後に控えた北京では，オリンピック開催前の国際文化交流が一足早く開催されている．そこでは日本の伝統文化もいろいろと紹介されていると思われる．

ところでこの文化交流に向けてかどうか分からないが，茶道の裏千家では当代の家元が，和室でも正座をしないで日本式のお茶を楽しめる「座礼棚（ざれいだな）」というお点前の方式を考案し，この5月に公表した．高さ18cm程度の炉が付いた専用の棚を使い，ちょうどあぐらをかく格好でお茶を楽しめる．

日本の茶道は，ハードウェアとしては躙（にじ）り口がある茶室だけでなく，風炉（ふろ）や棚，茶器，掛け軸，お花，茶菓子などがある．ソフトウェアとしては，各種のお点前の形式や会話の内容と順序，お茶のたしなみ方に至るまで，種々の形式の塊のような伝統文化となっている．お茶会で恥をかかないためには，初心者はただただ形から入ることを強いられているという感があった．

ある意味では，家元制度はこのような形式の伝承の上に成り立っている．しかし，裏千家ではすでに明治の時期に，外国人にも日本のお茶を味わってもらうために，椅子とテーブルで行う「立礼（りゅうれい）棚」を考案しており，伝統からの新生も目指していた．

● 中国では喫茶は実質が追求された

お茶の原産地の中国では，すでに唐代に官営の茶宴が年に1回開かれていた．唐代の詩人白居易（楽天）がかつて蘇州で役人をやっていたとき，自分の身分が低くて茶宴に参加できず，うらやんでいる情況を謳（うた）った詩[注]が残っている．形式美を追求する現在の日本の茶道と同じように，当時は中国でも格式や作法が煩（うるさ）かったのかもしれない．

中国では公式の茶宴以外に私的な茶会も持たれた．種々のお茶を飲み比べたり書画骨董（こっとう）の鑑賞だけでなく，詩を吟じたり作ったり政治談議をしたりして，いろいろな人が参加できる気楽なものだったようである．これが20世紀になると茶話会として英国の午後の紅茶のようになった．老舎の作品「茶館」はそのような中国の喫茶の情況を巧妙に描き出している．

中国共産党による革命後は，茶館のようなものは資本主義的な退廃として，しばらくは廃れていた．最近は北京の前門に旧時代を模した老舎茶館ができていて，客で賑わっている．

一方，裏千家の先代（15代）の家元は1979年に親善文化使節として訪中し，鄧小平やその後胡錦涛らの知遇を得た．1994年に天津に茶道の短期大学を開設し，日本から人を派遣して日本茶道の国際的な普及を図っている．

北京での国際文化交流に向けて，当代の家元も中国的なお茶の楽しみ方の雰囲気に合わせて，今回のような方式を考案したのかもしれない．ただ，座礼棚はあぐらをかいてお点前をするため，伝統的な和服姿の女性には向かないと思われる．

注：詩の題名は「夜聞賈常州崔湖州茶山境會亭歡宴詩」という．

● 日本語による非関税障壁

ところで日本では，技術の面でも日本独自の規格や方式が長らく採用されてきて，それが海外からの参入や海外への進出の障壁となってきた．

例えば日本に来た留学生の怨嗟（えんさ）の的である技術用語のカタカナ書きなどはその代表的な例である．この非関税障壁により，海外からの外国人技術者の流入を防いできたと同時に，日本の技術の海外への紹介を妨げてきた．現在ではカタカナ技術用語の功罪は，大きく割損な方に傾いていると思われる．

筆者は長い間，大学の授業でも客先への提出書類でも，カタカナの技術用語は使わず，直接英単語で記述してきた．もちろん商業雑誌の記事以外の学術論文もそうして記述・投稿してきたが，不満であっても異論を唱えた相手はいなかった．文句を言ったのは役所とそれに似た組織だけである．

筆者の感覚では，英文の技術用語を読んで理解できないような水準の人間は，もはやこの日本国内だけでも技術屋として通用しないのである．

茶道に限らず日本は長い間，海外の文物や手法を日本流に洗練させることで，世界の最先端と伍（ご）してきた．そこには，外国の人との交流や日本からの発信，日本人の海外への進出という観点はまったく欠如し，物の輸出だけに頼ってきた姿勢がある．

伝統文化の世界ですら，次世代への試みとして正座や女性の和服という伝統を変更しようとしている．先端技術の分野ではもっと大胆に新生を試みないと，今後の大きな発展を担う世代を育てることが難しいかもしれない．

古酒を新しい皮袋に

いかい・くにお　博士（工学）